

桑名文化協会

平成23年3月15日
第 29 号
桑名市文化協会
桑名市中央町2丁目37
TEL 24-1361
http://bunkyo-kuwana.jp

新春六華苑祭

初春の衣服

茶華香道部門

森野宗精

(表千家流茶道)

今年の干支は辛卯、うさぎ年です。一月に開催された新春六華苑祭の月釜茶会は表千家流担当で、一月十六日に離れ屋にて開催されました。

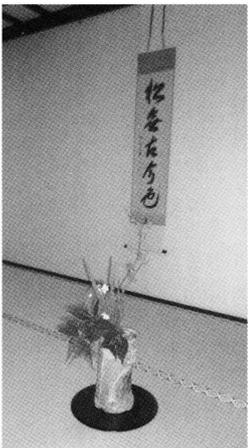


この日は例年のない寒気が南下し断続的に雪が舞う寒い日で、茶席からの庭の景色は銀世界でとても風情がありました。でもお越し頂きましたお客様はなれない雪で大変だったことでしょう。当日は洋館で音楽会、和館で邦楽の演奏会、番蔵棟では美術展などが開催され、お客様が来苑され

ました。

雪の中、子ども茶道教室の親子さんが大勢来て下さって、亭主の心をこめてのお点前で一服の茶を召し上って茶会の雰囲気味わって頂きました。又文化協会の方々も時間の合間を縫ってお越しになり松風の鳴りを聴きながら楽しいひと時を過ごされました。お客様の中には月釜に毎回お越し頂いている熱心なお方もございます。

茶道は無駄のない合理的な作法で日本の伝統文化でもあり一人でも多くの方に理解し参加して頂ければと願っております。



新春六華苑祭でのコンサート

音楽部門

東川恭子

(チルコロ・ロトンド)



となつて時間を過ごせた事は幸いでした。来苑の方々は、普段クラシック音楽になじみのない方もおられるかと、当日は親しみ易い唱歌やメロディーを選曲致しました。このように国から重要文化財として指定されている桑名の誇り高い空間でのコンサートは改めて地元とのつながりの大切さを私達に感じさせてくれる良い機会となりました。

最後に実行委員やこの催し物に係わられた方々に感謝申し上げます、桑名文化協会の益々の発展をお祈り申し上げます。

一月十五、十六日の二日間に渡って催された六華苑祭に私達チルコロ・ロトンドは第一日め、参加させて頂きました。大寒を控え、今年はや格別の寒さでしたが、幸いこの日は晴れて、来苑された方々もゆったりと館内を観覧されました。一昨年に続き二度目の参加でしたが、今回は他の音楽部門のグループと異なった土曜午後の比較的邦楽の方達と音の混在の少ない時間帯を選ばせて頂きました。



コンサート会場とは違い、館内見学の方達の移動もあり、集中力が途切れそうな場面もありましたが、聴いて下さるお客様の反応を間近に感じる事が出来、皆で一体

市民芸術文化祭を終えて

市民芸術

文化祭を終えて

趣味教養部門

廣山 三千代

(光映会)



第19回 市民芸術文化祭を
昨年10月16日、17日2日間くわなメ
ディアラ
イヴ多目的ホール
で開催いた
す事が

でき、又多数の御来場を頂き作品60点を発表できメンバー全員皆様に感謝しております。

私達の会は、「工芸としての染色」をコンセプトにしており、大作だけでなく小品であっても作者の意志の基での作品作りを楽しんでいる会です。そう言うとても堅苦しく思われるかわかりませんが先日皆で話しをしていたのです

が、これからもっと高齢者が増えて行く時代になり頭を使わないと痴呆になりやすくなるその防止の為に考え指先を使い、人と関わりを持ち話す事の大切さ、発想する大切さを感じ今年の作品展、市民展の出品作品のデザインへと話しが進んで行った次第です。

昨年3名市民展に入選致し1名は賞も頂きました。メンバーは現在6名ですが今年5名が市民展への出品を考えており1名は全国区の展覧会への出品予定をしております。会員全員芸術性を高めようと頑張っておりますので今後とも温かく見守って下さいます事を心から

お願い致します。



演劇公演「エキスパーツ」を終えて

演劇部門

相原 千景

(演劇集団Cブレンド)

メディアライヴの多目的ホールにステージを組んでの公演も、3回目になります。今回は、市民芸術文化祭参加作品として上演させて頂いたおかげで、各種広報などをご覧いただき、新しいお客様に多数ご来場いただけたことを、大変ありがたく思っています。おかげさまで、2日間3ステージで200名あまりのご来場をいただき、客席とステージが近いスタイルや、若い団員たちの元気な演技にも、ご好評をいただきました。

今回の芝居「エキスパーツ」は、それぞれの専門分野での能力を自負する大学生たちが繰り広げる、はちゃめちや誘拐劇。若者たちの、「自分は人よりデキるヤツだ」という自尊心、特別な存在でありたいという自負、「自分を自信がない」、だから虚勢を張ったり、人に対して攻撃的な態度に出してしまったりする、という愛おしい弱さをコミカルに描いた青春群像でした。「デキるヤツ」なはずの彼らは、知的でパ

ーフェクトな犯罪をなしとげようとする過程で、いとも簡単に壁にぶつかりまくり自分に失望していきます。そしていちばん聞きたくなかったトドメの一言「自意識過剰」。しかし、「自意識過剰だからタカビーだろうが、自分に自信を持つことは悪いことじゃないと思うけど」という救いを見つけ、前に踏み出していくのです。

これまでは、団員の友人や演劇仲間、演劇部の高校生など若いお客様がほとんどでしたが、今回、市民芸術文化祭の関係で年配のお客様にご来場いただき、あたたかい笑い声をたくさんいただきました。上演後にご協力いただいたアンケートには、「若い人たちが、どうしようもなくくだらないことを一生懸命やっている姿、ほほえましく楽しく見せていただき嬉しかった」という嬉しいコメント。



今後の活動の励みとし、Cブレンドだからこそ描ける「人間」を、表現していきたいと思っております。

「吟剣詩舞道の祭典 祭典を終えて」

芸能II部門

尾崎 三千男

(桑名吟剣詩舞連盟)



十一月七日の日曜日に市民会館大ホールで「吟剣詩舞道の祭典」を開催しました。

桑名吟剣詩舞連盟に加盟する約三百人の会員が、日ごろの練習の成果を発表しました。

載せた一枚の写真は、一際大きな拍手だった少年少女の皆さんの吟じている場面です。このように、伝統芸能に興味をもって取り組む少年少女、青年の皆さんが増えることを願っています。

今年度の特別企画として、

吟道関心流では、高い理想と強い決意を詠んだ詩を集めて「青雲の志と雄魂滅びず」と題した構成吟を剣舞、詩舞なども交えて発表しました。

岳風流 桑名吟道会では、楽市楽座の制度とともに栄えた桑名。

この地を訪れた文人墨客も多く「十楽の津」と題して構成吟を書や舞を交えて発表しました。

二十三年度は、桑名吟剣詩舞連盟が発足して二十周年を迎えます。

吟剣詩舞を愛好する私たちは、この節目の年に流派の垣根を越えた記念に残る大会にしようと、心一つにして準備を進めています。



「美術部門展を終えて」

美術部門

近藤 茂樹

(全日本写真連盟はまぐり支部)

第19回市民芸術文化祭には11



8点の作品を市民の皆さんにご覧いただきました。会場のくわなメディアライヴは作品展示環境から見て満足する施設ではありませんが、芸術アートの展示会場としては多少不満に思うのは小生だけでしょうか。

写真展示会を何度も経験している私にとって最も重要視するのは“光”です。蛍光灯の無機質な明かりは作品を生かすアイテムには到底不向きなものです。会場を包み込む柔らかな光の陰影は自然光とタンクステン光の調和で作品を芸術へと昇華してくれます。見る側からの視点も感動がより心に伝わり記憶に残ります。たかが3日間の判で押したような展示の仕方にそれほど傾注することは無いと



思いはすれど、会員皆さんの創作の努力を思えば会場演出にもう工夫した展示があったのかなと思いはしますが、よくよく考えればセンスも技術も無い小生の頭では所詮無理な話でもありました。今回の部門展の来場者688人で昨年よりやや微増しましたが、目標の1000人には遠く及びませんでした。事前の広報活動として案内DMも300部程度増やし会員さんに配布しましたが、会員によるPRだけでは限度もあり、より市民が知ることができている手段を文協のアドバイスも頂き考えてもらいたいです。次年度から担当が写真部門から陶芸部門へと変わります。2年間の美術部門展の開催が会員皆様の御協力のもと無事終わることが出来ました事に心より感謝いたします。

今後益々美術部門展が発展されることをお祈り申し上げます。また、一会員として微力ではありますが私たちが協力させていただきます。

「新春懇親会」

美術部門

森 一 蔵

(陶芸 個人会員)

平成二十三年一月十五日(土)、桑名市文化協会新春懇親会が桑名シティホテルで開催されました。昨年十一月三日(文化の日)に私と漆芸の山本翠松さんが桑名市文化功労者として表彰をうけました。その御祝いの披露の席を設けて頂き、教習長はじめご来賓の方々、文化協会の皆様にも受賞の御礼を申し上げる事が出来ました。

萬古焼は桑名発祥の焼物であります。ご存じのように、江戸時代の日本は藩が支配する国でした。この北勢地域も桑名、長島、菰野、神戸、亀山に大名がいて支配をしておりました。四日市は天領で代官が治める地でありましたので、この地方は桑名藩が親藩で大きく支配するところでした。川越、富洲原、富田、羽津、大矢知、そして桶までも領地だったのです。

最近、幕末当時の桑名藩の川越の大庄屋の古文書の調査で分かったのですが、萬古焼を名乗る窯の数は、本焼窯二十四基、錦窯三十三基ありました。手工業の産地を

形成していたといえます。これらの窯全部が桑名藩内ですから、萬古焼は桑名萬古といえるわけです。廃藩置県で行政区分が変わったため、萬古古は四日市と言われて久しいのですが、桑名と四日市どちらにも固執することなく、三重県の誇るべき焼物と見るべきです。少なくとも私はそういう意識の基に研鑽して行きたいと思えます。残された時間は少ないですが、少しでも多く後世に伝えられる作品をこの賞を励みに作る覚悟です。共に受賞いたしました漆芸の山本翠松さんと手を携えて桑名の伝統文化を守り発信していきたいと思えます。有り難うございました。



美術部門

山本翠松

(漆工芸 個人会員)



一月十五日(土) 桑名市文化協会新春懇親会が、桑名シティホテルで開催されました。昨年十一月三日平成二十二年度桑名市文化功労賞を受賞させて頂きお披露目として、森先生と共に、ご招待をして頂きました。

私の仕事は、この地方では、大変めずらしい漆塗りの職種となりましたが、桑名には、江戸時代から桑名盆、石取祭車と、代表する漆塗りがございます。

この時代から六代に渡りこの職を続けてまいりました。これもひとえに地元の皆様様の温

かいご支援のおかげと心から感謝申し上げます。今後は、この受賞を励みにこの漆塗りの職をご理解いただけるよう精進して行きたいと思っております。

平成22年度 北勢地域

文化団体交流会

一月十五日(土) 桑名シティホテルで開催されました。四日市市文化協会、NPO法人いなべ市文化協会、社団法人東員町文化協会、菰野町芸術文化協会の方々にお集まりいただき、各団体の事業内容の交流、意見交換を行いました。



平成二十二年 度月釜・華道展日程表

とき 午前十時～午後三時半
 ところ 六華苑 離れ屋(月釜) 番蔵棟(華道展)
 前売券 七百元(入苑料込) 当日券 五百円(入苑料別)

四月十六日(土)は、県民の日のため
 入苑料は無料となります。

開催日	茶道担当流派	華道担当流派
平成二十三年 四月十六日(土) 十七日(日)	表千家流 (十六日のみ)	未生流中山文甫会
五月十五日(日)	遠州流	池坊
六月十九日(日)	松尾流	石田流 いけばな池坊
七月十七日(日)	裏千家	勅使河原和風会
九月十八日(日)	煎茶松風流	草月流
十月十六日(日)	表千家流	MOA山月光輪花
平成二十四年 一月十五日(日)	松尾流	華道展はありません
二月十九日(日)	遠州流	竹真流
三月十八日(日)	裏千家	小原流

桑名市文化協会育成補助金の募集のお知らせ

桑名市文化協会では、桑名市の芸術文化振興のため、文化協会会員が企画して行う事業に対して補助金を交付します。つきましては申請される方を募集します。

◎補助対象団体等

文化協会の個人及び団体。ただし、平成23年4月1日をもって、桑名市文化協会に在籍一年以上の会員。

◎補助金の額

事業企画実施に要する交付対象経費の80%以内の額で30万円を限度とする。

◎応募の方法

文化協会事務局(教育委員会文化課内)で申請書類を受け取り、同事務局へ申請する。(文化協会のホームページからもダウンロードできます。)

◎応募受付期間

平成23年3月7日(月)～
 4月8日(金)
 (平成23年4月1日～平成24年3月31日の実施事業分)

◎申請の制限

平成21年度・22年度に補助金を受けた会員は交付申請できない。

◎お問い合わせ

桑名市文化協会事務局
 (桑名市教育委員会 文化課内)
 TEL 0594-24-1361



文協文芸

短歌

一楓・山城顕彰短歌
小・中学生 短歌部門

金首枝短歌社

岩花 キミ代

妹がぼくの後ろを歩いてるペタペタ
ペタと小さな足で

大成 渡辺 開斗

そろばんでフラッシュ暗算楽しい
な頭の中でひびくたま音

日進 水谷 海七

ギンヤンマ・ジェット機みたいな
その体乗ってみたいな雲の上まで

大山田西 杉野 将太

ながれゆく雲と一緒にながれてけ
私の中の晴れない気持ち

桑部 喜多 美優

自転車で遠くまで来たふと見ると
真赤な夕焼け疲れがとれた

益世 浅野 琴代

母の日になにもあげられずありが
とうそれでも母さん微笑んでいた

多度東 満仲 由佳

さあこいとピッチャーめがけて声
を出し気合い一発満塁ホームラン

大山田東 渡辺 栄也

おばあちゃんいつも脳トレやって
いる最近ボケがへってきたかな

在良 氏家 亜美

お母さんいつもたいへん子育てが
四人目できていそがしそうだ

伊曾島 幸野 涼雅

授業中みんな集中している時チヨ
ークがひとりお話ししてる

星見ケ丘 杉浦 舞香

きれいだな私の家のミニトマト
マトのにおい夏がもうくる

修徳 松岡 あかり

田植えしてむかしの人の苦勞しる
おこめ残さずぜんぶ食べよう

多度西 石川 佳希

びしょぬれだプールのそうじ気持
ちいい終ったあとにまぶしくなっ

城南 岩田 直斗

反抗期そんな自分がいやになる夏
の夕日に飛んでけサンダル

長島 阿万 未来

白い部屋 白い椅子に座らせれ恐
怖のドリルに歯をいじられる

光風 植松 裕之

高跳びの高さをこえるそのときに
時間が止まるそんな気がした

明正 玉井 綾乃

フィリピンに帰ったかったでも今
は日本がとっても好きになったよ

光陵 ブナヨグ レノン

大切なクラリネットと私の手なか
よしこよしで一曲うたう

陽和 林 可奈子

はじめてのいとこに会いに東京へ
生まれたての手にぎりかえした

陵成 中川 碧

まっさらでつまらなかつた部屋な
のにポスター一つに浮つく心

津田学園 後藤 舞香

桑名文協の歌人として

松井久雄

いつになっても幼いけれど、桑
名文協の歌人として、詠み続けて
いこうと思います。

ゆたかな感性ゆきたつ桑名文協
にすることが、かぎりなくしあわ
せです。

「またあした」沈む夕日の声がす
る「またあしたくる」ゆるりこゆ
るり

いとおしき証ならんか国境なき猫
族二匹首輪して来る

首輪には電話番号名まえあり ク
ロペーさんちの佳き女来たり

三日月の抱くが如く光る星金星と
聞く 天空のシヨウ

川は流れてどこどこ行くの花とし
て沖繩歌う我ら若者

泣きなさい笑いなさいと桑名発シ
ヤンテクレール歌う沖繩

吟詠

くわな川柳会

真田虎風(五市)

題しらず 曾欄好忠

なげやなげ蓬が私のキリギリス
過ぎゆく秋は げにぞ悲しき

私は桑名吟道会において漢詩や短
歌俳句を吟ずる学習をしています。

この春の競吟会に右の一首が課せ
られました。教本の解説によれば

「杣」は植林された木々。「キリ
ギリス」はおろぎの古語。

例会の席で、杣が山なのか、森
あるいは林だろうか、荒れた庭が

森に写るのだろうかとかくさんの
議論がなされました。コオロギの

眼には一本の蓬さえもが古木に見
えたのであろう。という解釈にお
ちつきました。

誇張法、倒置法、擬態法などで
その味をよりいっそうさわだたせ

ている俳句や川柳も多々みられま
す。

葉キリアリこれが富士かと菜の花
で。腰痛でもう登れぬと蟻メール。

虎風
庭の紅梅は風雪に負けぬ力強さ
で日毎につほみをふくらませとい

ます。

寒梅 新島襄

庭上^ニ一寒梅 笑^ハ侵^ム風雪^ヲ開^キ
不^レ争^ハ又^レ不^レ力 自^ラ占^ム百^花魁^ヲ

私の大好きな一詩です。
還暦は越したものの現役で工場

勤めをしています。活きのよさだ
けで早春の、晩秋の情を吟じたい
と思います。

川柳

会員近詠

赤須賀の昔を語る深い皺 寺本 三郎
 ふる里の空は私を裏切らぬ 瀬古 博
 金かけて大学出ても無い職場 梶 泰栄
 旗日でも国旗かかげる家が無い
 いい風を総理も凧も待つている
 太陽を避けて咲きたい花もある 川瀬 秋廣
 九十歳まだ生きてると来る賀状 水谷 真
 作句してボケてはおれぬ趣味を抱く
 政治家の量より質を民は待つ 真田 五市
 省庁が無駄を残すか甘い汁
 とつたりを霞ヶ関に当てはめる 清水 健吾
 霜風に百の笑顔のビワの花
 人生のコツ程々にさばを読む 森 繁生
 説教へ耳より足の方が負け
 告白が遅すぎ愛がしびれてる 木原 広志
 昭和史を知らぬ子達のパラダイス
 気前よく奢り翌日昼を抜く
 財布から諭吉は旅へ行ったまま
 ○多度川柳の会は昨秋旗上げ現在
 六名所属、会員募集中です。

特選句

俳句サークルあやめ会

菊田 真佐

桑名市中央公民館を主会場として約四十年間、毎月句会を重ね、その都度発行して来た「あやめ会」誌は、この二月八日で四五三号となりました。

一年のうち三回は館外で吟行、句会を楽しんでいます。

なかでも昨年十月十二日の多度大社では芭蕉の忌日に因み境内にある芭蕉句碑で供養祭が執り行われ、一同揃って参加出来たのは幸運でした。九年ほど前から御指導頂いている石井いさお先生の句と当日の特選句を御紹介します。

神韻の静かに深き秋の滝

講師 石井いさお

しろがねの水の階秋の滝

伊藤 博子

水底を風梳くごとし秋の溪

根来 毅

天つ日を纏ひ耀ふ竹の春

寺本実和子

次は本年初句会の特選句です。

「はやぶさ」の見て来し宇宙や

野中 博宣

初日待つ

元朝の塩花高き花街かな

佐野 芳子

餅花の枝垂るる先に席を置き

小林 弓子

赤い花

現代詩 やまぶき

岡本 妙子

夕暮れに
 初雪が舞っている
 ひとり窓越しに見る雪は
 体の芯まで凍らせて
 白い淋しさが降りてくる

それは空に住む人の
 思いのかけらなのか

見えないものが見たい
 いなくなった人に会いたい
 はみ出してゆく思いは
 どんどんふくらんで：

雪はしんしんと積もって
 泣きだしそうな雪だるまは
 唇を青くした

そのとき

娘から携帯メールが届いた

「明日、仏様のお花を届けます

雪の日は外に出ないでね」と

空っぽの器に注がれた文字で
 湯気の立ち上る夜に変わった
 娘がいて、孫もいて

一人で住んでいても一人じゃない
 空の上にも家族がいる
 雪だるまを作って

唇に山茶花のひとひらを埋め込んで

ほくの時計

現代詩 やまぶき

堀川 孝子

先生には教室の時計がカチカチと
 お母さんにはお家の時計がコチコ
 チと毎日毎日気になります。

ぼくは今
 プラスチックのレールを敷いて
 駅まで建てて
 新幹線「のぞみ」は発車します

赤いランプ光らせ
 超スピードで鉄橋を渡っています
 川に落っこちないか
 ドキドキしています
 そんな時

「おかたずけしなさい」と言われ
 ても電車の走る音は大きいのです
 ぼくには先生の声も
 お母さんの少し怒った
 大きな声も聞こえません

ロケットが火を噴いて飛び出しま
 した
 新幹線は部屋の中を
 先生とお母さんに乗せて
 ぐるぐる回っています

ぼくはもう ぽっかり浮かんだ地
 球と明日もいっしょに遊ぼう
 と 交信しているのに
 お母さんが呼んでいます
 おなかのすいたぼくを

桑名地名あれこれ(4)

田町の笛川

社会文化部門
大河内 浩
(個人会員)

石取祭が行われる春日神社の西に田町というところがあります。

江戸時代春日神社の境内に神宮寺があった頃、その御本尊の金の仏像は、もつと昔にこのあたりが海であったときに漁師の網に掛かったもので、その拾い上げた海域が現在の田町であると伝えられます。

慶長の町割りで桑名市街が形成されたときには浄土寺の境内で、その後浄土寺が現在の清水町へ移ると、跡の田地を築き立てて慶長七年(一六〇二)七月に田町が開かれたことが記録にみえます。

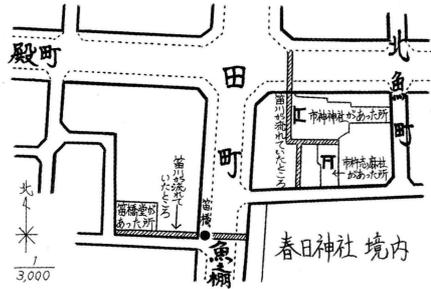
田町には、町内の東南端、北魚町との境に、弁財天を祀る市杵志麻社があり(明治四十年に春日神社境内の母山神社へ合祀)その境内御神池から笛川という用水路が町内へ通じていました。これにちなみ石取祭車に用いる天幕の図柄には弁財天が描かれ、揃い絆纏には「笛川」の雅号が染めぬかれています。笛川の極一部は昭和五十年代頃まで確認でき、魚之棚通りを横切るその水路に架かる短い橋

笛川の雅号を染めぬいた絆纏を着用する田町の石取祭での光景



「笛橋」が南魚町との境でした。

この笛橋の脇、田町西側にあった笛橋堂写真館で明治三十年(一八九七)に



撮影された元陸軍大将立見鑑三郎の家族写真が、一昨年に桑名中央図書館へ寄贈されています。

平成22年度新入会員

○琴修会名古屋中央支部長島町

あすは 代表 伊藤 玲子

(大正琴)

○菅原 真治

個人会員(クラシックギター)

○石川 木綿子

個人会員(クラシックピアノ)

○ハラウ ナニ ハエナ オカ

ラウアエ 代表 加藤 清子

(フラダンス)

第19回総会のご案内

日時 平成23年5月8日(日)

午前10時から

(受付は午前9時30分から)

会場 桑名市大山田コミュニティ

プラザ 中会議室

※各部門から代議員の選出をしていただきます。詳しくは、各部門長から連絡します。

編集後記

各公民館では、文化祭や成果発表が盛んに行われています。

出品作品の鑑賞をしていると、制作された皆さんの心が伝わってくるものばかりです。また、舞台発表をしている方々の表情や姿勢は生き生きしていて、見学者に元気を分けてくださいます。

ただ、出品数や舞台発表をする人数が少し減っているのではないかと感じますがいかがですか。

市民の皆さんが、文化や芸術活動に生きがいを見つけ、益々、豊かな人生を送られることを編集者一同願わずにはられません。

(尾崎三千男)

広報担当副会長

委員

文学部門	中山 雅幸
美術部門	木原 広志
音楽部門	近藤 光治
芸能I部門	岡村 理恵
芸能II部門	渡邊 法子
芸能III部門	尾崎三千男
演劇部門	水谷 巴美
社会文化部門	相原 千景
茶華香道部門	大河内 浩
趣味教養部門	白木 宗弘
	加藤 誠